

サハ共和国・ヤクーツクだより ②

杉嶋俊夫

ヤクーツクに来て早くも2か月経ちました。雪もようやく解け、待ちに待った春がやってきました。といっても5月はまだ気温の変化が激しく、上旬に17度まで上がったと思ったら、下旬現在の気温は6度。まだ、本当に春がきたという気はしません。今回はサハを代表する楽器を中心に少しお話ししたいと思います。



Lena river ヤクーツク市の北を流れるレナ川は、氷が毎年5月中旬に割れます。外国人留学生らと一緒に見に行ったのですが、“流”氷は見られず少々期待外れでした…。

■ “口琴王国”サハ

みなさん、口琴（こうきん）という楽器をご存知でしょうか。長さ10cm前後の、口にあてたまま指で弾いて演奏する楽器です。世界中の民族に伝わっており、日本でも江戸時代には「びやぼん」と呼ばれ大流行したそうです。アイヌ文化にはムックリという竹製口琴があり、今でも演奏する人々がいます。

先月のヤクーツクだよりの冒頭で田井さんも触れていただきましたが、サハ共和国ではホムズという名の金属製口琴が民族楽器として受け継がれています。ヤクーツク市内には世界諸民族ホムズ（口琴）博物館や、様々なホムズ演奏アンサンブルがあり、女性トリオ AYARKHAAN は世界的に活躍しています。

■ サハの“ゆたかさ”

民族音楽愛好家の間ではサハといったらホムズというくらい有名な楽器ですが、サハは音楽活動そのものが大変活発です。春は毎日のように市内のどこかで様々なジャンルのコンサートが開かれており、ポップミュージックはロシアのものとサ



ホムズ（口琴）練習風景 子どもセンターでは、歌・ダンス・刺繍など様々な講座が開かれています。そのひとつ、ホムズ教室を見学させていただきました。

ハのものが共存しています。さらに音楽以外の分野に目を向けてみると、ダンス、バレエ、オペラ、演劇、美術、スポーツ活動などが町の人々にとってかなり身近なものであることに気づきます。そして、ホムズが発達した背景には高度な鍛造技術もあります。こうした“ゆたかさ”が厳しい自然環境の中での暮らしを支えてきたのかなと感じます。



子ども芸能コンテストに集まった子ども達 休日に市内の子どもセンターを覗いてみたら、ちょうど全共和国子ども芸能コンテストが開かれていました。優勝したのは日本の踊りを少しミックスした、地方から参加したグループでした。

サハ文化の夕べ 市の外れにある施設で「サハ文化の夕べ」が催されたが、その催しが終了すると同時に若者が歌いだし、どんどん人が集まってきて踊りの輪ができました。

杉嶋俊夫 略歴：東京都町田市生まれ。千葉大学卒。大学で認知心理学を専攻、途中で言語学に転向、シベリア先住民の言語を学ぶ。院在籍時に西シベリア・トムスクの大学に留学したことがきっかけで、トムスク市やロシア西部・リャザン市にある大学で日本語を教える。今回の派遣も、リャザン大学の時と同じ日露青年交流センターの派遣プログラムによる。

サハ共和国：日本(約38万km²)のおよそ8倍の広さに相当する国土を持ち、全て永久凍土で、面積の40%は北極圏に含まれる。針葉樹林帯(タイガ)がサハ共和国の47%を覆う。サハ南部には炭鉱地帯があり、東部は金が豊富である。

山がちな国土なため、冬の寒さは極限に達する。南極を除くと世界最低気温となる氷点下71.2度を1926年1月に記録したオイミヤコンや、やはり冬の酷寒で知られるベルホヤンスクもあり、北半球の極寒地と考えられているが、雪は少ない。

1月の平均気温は北極海沿岸でマイナス28度、その他の内陸部ではマイナス50度に達する。7月の平均気温は北極海沿岸ではわずか2度、一方内陸部では19度にまで上がり、特に内陸盆地ではしばしば猛暑となる。

サハ人は13世紀に中央アジアからこの地に進出したトルコ系民族でモンゴル系とも混血しており、もともとこの地にいた狩猟採取民族を征服し同化した。



(ウィキペディア フリー百科事典抜粋)